

二〇二五年五月一六日

出荷終へひと息つけるラムネかな
汗光る氣迫の声や紙芝居
なだらかな稜線映し田水張る
曇天に紛れて淡し桐の花

二〇二五年五月一五日

堰堤を洗ふしぶきや夏木立
青蔦の虜となりし農具小屋
くれないの傘傾ぎゆく賀茂祭
初蝶の影すべりゆく石畳
目瞑りてせせらぎを聞く薫風裡

二〇二五年五月一四日

緋牡丹の衣脱ぐやうに散りにけり
また小さくなりたる母や更衣
乙女等の声麗らかに茶摘み歌
薔薇園の階段に沿ふ水の綺羅
万緑を砦としたる城櫓
夜の浅蜩放物線に水を吐く
墨流しめく雲に透け月涼し
五月闇をんなの坑内夫もちらと
若葉風展望台に深呼吸

二〇二五年五月一三日

坑道に響く樂あり滴れる
池鏡して若葉影をどらしむ

千鶴

康子

むべ

わかば

千鶴

みきえ

あひる

勉聖

澄子

むべ

あひる

山椒

もとこ

かかし

えいじ

むべ

うつぎ

やよい

うつぎ

わかば

うち延べし金の絨毯麦の秋

廃校の机の傷や花は葉に

水満ちし田にひろがりし青天井

二〇二五年五月一二日

山壁の深きより霧立ち昇る
大輪の数多かぐはし薔薇の門
尼の墓へと日の班洩る若葉かな
スプーン舐め食べ頃を待つシャーベット
蔓薔薇の額縁なせる格子窓
葉桜のトンネルなせる遊歩道
囀りに眼を休めたる読書かな
柏餅できたてはまざ仏壇へ
沖風ぎて雲母光りす夏の海

二〇二五年五月二日

万緑をまたぐ吊り橋仰ぎけり
老いどちのコーヒープレイク薔薇の卓
田起こしの音こだまする峽の里
オルレアの白の屯に風五月

二〇二五年五月一〇日

若き日の恋文出でし曝書かな

もとこ

かかし

和繁

澄子

むべ

なつき

康子

せいじ

むべ

山椒

ほたる

澄子

康子

きよえ

やよい

むべ

博充

毎日句会みのる選・二〇二五年五月一八日